

立原正秋全集

第六卷

立原正秋全集

第六卷

角川書店

立原正秋全集 第六卷

昭和五十八年十一月十二日初版発行

著 者 立原正秋

発行者 角川春樹

印刷所 新興印刷株式会社

製本所 株式会社鈴木製本所

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二一十三—三

電話東京二六五—七一一（大代表）

振替東京三一—九五二〇八 一—〇二

Printed in Japan 0393-573406-0946(0)



落丁・乱丁本はお取替えいたします

立原正秋全集 第六卷 目次

恋の巢

五

渚通り

一五

扇

二〇

相聞歌

三

寒い冬

二九

暗い春

二七

競馬

三二

女の手紙

三五

石楠花

三七五

双頭の蛇

四二五

七月の弥撒

四四七

解題

武田勝彦
四七

恋の巣

第一章

一

ことし三十歳になる新劇女優小牧梓は、ここ相模湾が一望のもとに見渡せる七里ヶ浜に越してきてから八年になる。いまから十二年前、梓は金沢の高等学校を卒業すると上京し、劇団未来座の付属養成所の試験を受けた。首尾よく合格し、一年の養成期間を経て、未来座の研究生として在籍することが出来た。その年の秋、未来座は、新人公演としてラシーヌの「フェードル」を公開した。そのとき梓はアテネ王妃の「フェードル」役に抜擢され、新人としては異例とまで評された演技力を示した。王妃「フェードル」が義理の子イポリートに道ならぬ想いを懸ける場面、イポリートに拒まれ、王に彼を讒訴し、竟にイポリートは王のために非業の死を遂げ、フェードルも毒を嚥んで死を招く、この情欲の虜となった女主人公の性格を、梓は古典悲劇として完全に演じきったのであった。なによりも幸運だったのは、新進フランス文学者の生田俊行が、この新人公演のために「フェードル」を新しく訳してくれたことであつた。それは翻訳臭のしない文体で、「フェードル」の成功は、なかばはこの訳文に負うところが多かつた。

この公演が終る頃から、梓のまわりに男の取巻きが出来はじめた。それまでも取巻きがいなかったわけではない。夜、バーで働きながら劇団に通っていただけに、梓の若さと美貌に惹かれた男達がかなりいた。

東洋製粉株式会社の社長である尾山祐太郎が梓の庇護者になつたのはその頃である。彼は最初、純粹の観客として

梓の前に現われた。彼は、若い頃芝居に熱中したが、父の許しを得られず、学校を出るとすぐ父の製粉会社に入り、いらい今日まで順調に歩いてきた財界人であった。しかし、芝居をやろうとした往時の夢はまだ彼の裡で燻^{くも}っていた。とはいえ、いまさらその世界に足を踏み入れるわけにも行かず、いくつかの劇団を援助することで自分を慰めていた。例えば、公演パンフレットには、必ず東洋製粉株式会社の広告をだしていた。彼はその広告に、一流新聞に支払うと同程度の広告料をだしていた。純粹の新劇庇護者でない限り出来ないことであった。

そうした彼が、金をだすから、バーをやめて芝居だけに●からを入れる、と言ってくれたのである。条件はなにもなかった。このとき梓は二十歳になったばかりで、尾山祐太郎は五十二歳であった。尾山祐太郎の純粹な意図を疑うべきものはなにもなかった。梓はバーをやめて尾山祐太郎の援助を受けることになった。そして、毎月の末、二人は銀座で落ちあつて夕食をとにし、そのとき梓は金を貰う、という生活が二年続いた。

その二年目の秋の終り、尾山祐太郎は銀座のレストランで梓と落ちあつたとき、二か月ばかりヨーロッパに行つてくるから、と言つて翌月分の金をいっしょに梓に手渡した。そのとき、ヨーロッパならいっしょにしたいわ、と梓が言いだしたのが、それまで保ち続けてきた二人の間を超えさせるものとなつた。

二人がヨーロッパを旅行しているあいだ、日本では二人のことが醜聞の種として週刊誌に書きたてられていた。二人は十二月の末日本に還るまでそれを知らなかった。尾山祐太郎の旅行は私的なものであつたから、会社でも、ヨーロッパをまわっている彼に知らせようがなかつたのである。二人が羽田に降り立つたとき見たものはカメラの放列陣であつた。

カメラは梓のアパートにまで追いかけてきた。

梓が再び尾山祐太郎と逢つたのは、あくる年の二月である。

「あたし、東京からはなれたいわ」

とそのとき梓は言つた。

「芝居をやめちゃいかんよ」

尾山祐太郎は梓をなぐさめた。

「芝居はやめません。でも、東京からは離れたいのです。それより、あなたの方こそ大変だったでしょう」

「なに、私の方はたいしたことはない。取り屋といって三流雑誌の記者が金をたかりに來ただけだ」

「その人達にいちいちお金を出していらいっしやるの？」

「いや。出す理由がないから一文も出さない。その点、私はきわめて合理的だ」

彼は多くを語らなかつたが、梓は、彼の家庭のなかを想像し、やはり大変だったろう、と思った。すでに他家に去つて子までなした娘がいたし、家にも息子や娘がいた。事実彼は家庭ではあれいらい孤立状態におちいつていた。彼の父は東洋製粉株式会社の会長としてまだ矍鑠かくしやくとしていた。

「馬鹿めが！ 女がいて悪いというのではない。こともあろうに女優とは何事だ。あれは藝人だ」

と父は七十八歳とは思えぬ大声で彼を叱つたものである。尾山家は代々武士の家柄で、製粉会社をおこしたのは三代前の人であつた。つまり彼の父の言によれば、尾山家という十代以上も続いた輝かしい家名に染みをつけたのは藝人を囲つた祐太郎である、とのことだった。

「劇団に通える距離でないといかな。鎌倉あたりの海岸に小さな家でも買おうか」
しばらくして彼は言つた。

「そうして戴けると嬉しいんだけど」

「さがしてみよう」

こうして移つてきたのが、いまの七里ヶ浜の家である。二百坪の土地に五十坪の家で、周りは松林であつた。

梓は十九歳の秋にラシーヌの〈フェードル〉を好演して舞台女優として出発したが、その後つぎつぎとレパートリーをふやし、いまでは女としても幅が出来、未来座の中堅女優の一人になつていた。最近の好演は、去年の秋に新宿の厚生年金会館ホールで開いた創作劇の〈春のいそぎ〉で、小説家の秋篠弘毅あきしのひろたけが、梓のために書きおろした彼としては初めての戯曲であつた。戯曲のあらすじは、旧家の末裔であるいとは同土が、現代の荒っぽい時世に合わず、竟に

心中する、という悲劇で、梓は、若い女主人公の役を演じて好評だった。

公演中、秋篠弘毅は一日として欠かさず劇場に通い続けた。梓は、自分に向けられた秋篠の視線を知っていた。美貌の舞台女優として十一年、たくさんの男たちから愛されてきた経験を持っているだけに、げんに自分が彼から愛されているのを感じとるのは造作もないことであつた。

公演が終つた日、梓は、秋篠とのあいだにやさしい感情が通いあっているのを自分の裡に発見して愕然とした。常に渝らぬ尾山祐太郎の、父にも似た視線を知っているだけに、梓ははじめ秋篠に向けられた自分の感情を嘘だと思つた。多くの男たちに愛されてきながらも相手に愛情を感じたことのない梓にしてみれば、これは有り得ぬことだった。なにごとにつけ、大げさなこと、賑やかなことの好きな映画界と異なり、新劇の世界は常に地味であつたが、それでもなかには華やかに名を流す女優がいた。梓はそのなかでも地味に歩んできた女優であつた。十一年前、新人公演のためにラシーヌの〈フェードル〉を新しく訳してくれた生田俊行も、梓に渝らぬ好意をよせていたが、しかし二人のあいだは友人の域を出なかつた。彼は三十八歳の今日まで独身で、もし十年前に彼から申しこまれていたら、梓は彼と結婚していたはずであつた。彼にはどこか気弱な個所があり、劇団に出てきてもいつも控え目に他人の話に耳をかたむけているような人であつた。彼は、未来座の文藝部員としてフランスの戯曲をいくつか訳していた。彼にくらべると秋篠はなにごとにつけ派手だつた。秋篠の〈春のいそぎ〉の上演権をとつてくれたのは生田であつた。二人は、専攻の科はちがつていたが学校では文学部の同級生であつた。公演初日の幕あけ寸前に、秋篠さんあなたに御執心らしいわ、とかたわらにいた年上の女優からささやかれたとき、梓は不意にあふ赧くなつたが、これはかつてないことで、あの方は聡明すぎて恋愛など出来ない質の人よ、などと出まかせに答えたが、初日くらい、秋篠の視線が他の女優に向けられたときなどは、やはりそのことが氣になった。彼の目がちよつとも自分に向けられないのは、何かさびしい氣がした。

そして秋篠弘毅は七里ヶ浜の梓の家に通つてくるようになった。

梓の家には劇団関係の客が絶えなかつた。つまり梓は、数年前から、未来座での公演では必ず主役をつとめる存在

になっていたのである。客足が繁くなりだしたのはその頃からであった。尾山は週末にしか来なかったが、彼が新劇の庇護者であるのは隠れもない事実だったから、彼と梓の生活は、劇団の人達の前では公開されていた。梓が地方公演に出かければ、尾山とは一か月も逢わないことがあった。そんなわけで、梓が在宅しているときは客が絶えなかったし、尾山も週末には必ずきてくれた。

「春のいそぎ」が好評だっただけに、未来座は、翌年の秋に上演する予定で、梓のためにもう一本戯曲を書いて欲しい、と秋篠に依頼した。秋篠はひき受けてくれた。「春のいそぎ」の終演日が十一月末だったから、あれからもう四か月たつのに、秋篠には戯曲を書いている様子がなかった。おそくとも八月のはじめまでには原稿が欲しい、と未来座は言っていた。

二

四月はじめの木曜日の午後、七里ヶ浜の梓の客間では、生田俊行が一人で所在なさそうに煙草を喫んでいた。間もなく二時だというのに、女主人がおきてくる気配はなかった。

「お酒でもさしあげましょうか？」

茶をいれかえにきた富美子が生田に訊いた。三年前、梓が郷里の金沢から連れてきた女で、梓の遠縁にあたり、夫婦で梓の家に住込んでいた。今年二十六歳になり、かなりの美人で、夫は尾山の製粉会社に勤めていた。

「お酒はいい。秋篠とちがい僕は昼酒はだめだ」

「そういえば、秋篠さんがお見えのようすわ」

と富美子は窓ごしの松林を見た。

生田が窓ごしに目を移すと、疎林のなかの一本道を、鉛色のコールテンの上衣を着た秋篠が、だるそうな歩きかたで登って来るのが見えた。

「秋篠さん、いろんな表情をもっていらいっしやる方なのね」

「いろんな表情？」

「ええ。ひどくだるそうな顔を見せたかと思うと、つぎにはもう才気煥発にみなさんと話していらいっしやるし」

「あれは危険人物だ」

「あら、どういう意味ですの？」

「知らん方がいい、富美さんは」

このとき玄関が開く気配がしたので、話はここで跡切れた。富美子が出て行き、入れかわりに秋篠が入ってきた。

「マドンナはまだおやすみかい？」

「そうらしい」

「このうららかな日に安眠できるとは幸福なひとだな」

「なんだそれは、皮肉かい。尾山さんの前ではそんなことを言わん方がいいぞ」

「あの偉大な庇護者は鷹揚すぎて、そこまでは深読みしないだろう」

そこへ富美子が茶を運んできた。

「火曜日に劇団に顔を出したら、催促しておいてくれ、と言われたが……」

「戯曲か。まだ一行も書いていないよ」

秋篠は大きなあくびをすると、それから茶をすすった。

「間にあわせてくれよ。まだ四か月あるから大丈夫だとは思いますが、君の間にあわないと、この秋は翻訳劇をやらねばならん」

「富美さん、このあいだ飲みのこしたブランデーがあつたでしょう、あれをくれないか」

「あら、あの日、秋篠さん、全部お飲みになられてお帰りになったのに」

富美子はおかしいといった顔で秋篠を見て答えた。

「では尾山さんのを一本持つてきてくれないか。ところで生田、これは実に馬鹿げた話だ。小説家が戯曲を書かねばならないなんて」

「なにを言いたいんだ？」

すると秋篠は、富美子が客間から出て行くのを見済ましてから、

「きみはむかし、マドンナのためにラシーヌを訳し、それが大当りをとったそうだね」と声を低めた。

「それは十年前の前のはなしだ」

「そのときなぜ結婚しなかった？」

「つまらんことを言うなよ」

生田はてれくさそうな表情を見せた。

「俺なら結婚したな」

「しかし、秋篠、あのひとは、尾山さんのような人がいたから、女優として成功したんだ。経済的な裏づけがあるから、映画やテレビに出る必要はなかったし、思い通りの芝居がみっちり勉強できたわけだ」

「話がちがう。女優になれるかなれないかは才能の問題だ。ラシーヌは尾山氏が庇護者としてマドンナの前に出現する以前の上演だ」

「それはそうだが、きみは、そんな話を誰からきいたの？」

「夏山房子だ」

「あのお喋り女優め！」

生田は眉をひそめた。

「その口調では夏山房子になにか遺恨でもありそうだな」

「そんなものはない」

生田は慌てて打ち消した。

「遺恨がないとすれば、マドンナに対するきみの想いはまだに続いているわけだ。夏山房子は才能はないが男から恨みを買うような女優ではない。その女を、きみはいま、お喋り女優め！ と表現した。つまり、きみは、マドンナを庇っているわけだ。尾山氏とはちがった意味だね」

「判ったよ。きみは相変らず頭の回転が早い。……ことわっておくが、あのひとのいまの平静な生活を乱さないでくれ。きみは嗤うだろうが、……僕はとうとう白状してしまったようなかたちだね」

「白状したというが、きみがここに通いつめていること自体が、白状しているも同じことではないか。それより、きみは、あのひとの現在の精神の平静さを信じているのか？」

秋篠はわらっていた。

「いまのあのひとのどこに乱れがある？」

生田はいくらか憤然とした様子で訊きかえした。

「きみが信じているのなら、それはそれでいいだろう。……舞台で演じられる役者の動きが、どれほど美しいかたちを表現しようと、所詮それは芝居だ、ということ俺は言いたかっただけだ」

「それは、どういう意味だ？」

「俺は、あのひとでなければ演じられない芝居を一本だけ書く、ということだ。芝居でない芝居をね。だが、実に馬鹿げた話だ。俺はこの芝居のために、今年は小説は不作の年になりそうだ」

このとき、富美子が盆にブランデーの壺をのせて入ってきた。

「いま起きてお風呂に入ったところですよ」

と彼女はブランデーの壺をテーブルに移しながら二人に報告した。

「別に用があつて訪ねてきたわけではないから、ゆっくりお入り、と伝えてくれ」と秋篠が言った。